

中国怪奇小説集

搜神記（六朝）

岡本綺堂

青空文庫

主人の「開会の辞」が終った後、第一の男は語る。

「唯今御主人から御説明がありました通り、今晚のお話は六りくちよ朝う時代から始める筈で、わたくしがその前ぜん講こうを受持つことに
なりました。なんといつても、この時代の作で最も有名なものは『搜神記』で、ほとんど後こう世せいの小説の祖をなしたと言つてもよろしいのです。

この原本の世に伝わるものは二十巻で、晋しんの干宝かんぼうの撰せんということになって居ります。干宝は東晋の元げん帝ていに仕えて著作郎ちよさくろうとなり、博覧強記をもつて聞えた人で、ほかに『晋紀』という歴史も書いて居ります。、但し今日になりますと、干宝が『搜神記』

をかいたのは事実であるが、その原本は世に伝わらず、普通に流布するものは偽作ぎざくである。たとい全部が偽作でなくても、他人の筆がまじっているという説が唱えられて居ります。これは清しんちよ朝う初期の学者たちが言い出したものらしく、また一方には、たといそれが干宝の原本でないとしても、六朝時代に作られたものに相違ないのであるから、後世の人間がいい加減にこしらえた偽作とは、その価値が大いに違うという説もあります。

こういうむずかしい穿せん索さくになりますと、浅学のわれわれにはとても判りませんから、ともかくも昔から言い伝えの通りに、晋の干宝の撰ということに致して置いて、すぐに本文ほんもんの紹介に取りかかりましょう」

首の飛ぶ女

秦しんの時代に、南方に落頭民らくとうみんという人種があつた。その頭かしらがよく飛ぶのである。その人種の集落に祭りがあつて、それを虫ちゅうら落くという。その虫落ちゅうらくにちなんで、落頭民と呼ばれるようになったのである。

呉ごの将、朱桓しゆかんという將軍がひとりの下婢かひを置いたが、その女は夜中に睡ねむると首がぬけ出して、あるいは狗いぬくぐり寶たからから、あるいは窓から出てゆく。その飛ぶときは耳をもつて翼つばさとするらしい。そばに寝ている者が怪しんで、夜中にその寢床を照らして視みると、

ただその胴体があるばかりで首が無い。からだも常よりは少しく冷たい。そこで、その胴体に衾よぎをきせて置くと、夜あけに首が舞い戻つて来ても、衾にささえられて胴に戻る事が出来ないので、首は幾たびか地に墮おちて、その息づかいも苦しく忙せわしく、今にも死んでしまひそうに見えるので、あわてて衾を取りのけてやると、首はとどこおりなく元に戻つた。

こういうことがほとんど毎夜くり返されるのであるが、昼のあいだは普通の人とちつとも変ることはなかつた。それでも甚だ氣味が悪いので、主人の將軍も捨て置かれず、ついに暇ひまを出すことになつたが、だんだん聞いてみると、それは一種の天性で別に怪しい者ではないのであつた。

このほかにも、南方へ出征の大將たちは、往々おうおうこういう不思議の女に出逢つた経験があるそうで、ある人は試みに銅盤をその胴体にかぶせて置いたところ、首はいつまでも戻ることが出来な
いで、その女は遂に死んだという。

※猿

蜀しよくの西南の山中には一種の妖物ようぶつが棲んでいて、その形は猿に似ている。身のたけは七尺ぐらいで、人の如くに歩み、且かつ善く走る。土地の者はそれをかこく国といい、又は馬化ばかといい、あるいはかくえん※猿とも呼んでいる。

かれらは山林の茂みに潜ひそんでいて、往来の婦女を奪うのである。美女は殊に目指される。それを防ぐために、ここらの人たちが山中を行く時には、長い一条の縄をたずさえて、互いにその縄をつかんで行くのであるが、それでもいつの間にか、その一人または二人を攫さらつて行かれることがしばしばある。

かれらは男と女の臭においをよく知っていて、決して男を取らない。女を取れば連れ帰って自分の妻とするのであるが、子を生まない者はいつまでも帰ることを許されないので、十年の後には形も心も自然にかれらと同化して、ふたたび里へ帰ろうとはしない。

もし子を生んだ者は、母に子を抱かせて帰すのである。しかもその子を育てないと、その母もかならず死ぬので、みな恐れて養

育することにしてはいるが、成長の後は別に普通の人と変らない。それらの人間はみな楊ようという姓を名乗っている。今日、蜀の西南地方で楊姓を呼ばれている者は、大抵その妖物の子孫であると伝えられている。

琵琶鬼

呉ごの赤鳥せきう三年、句こうし章しょうの農夫楊よう度たくという者が余姚よちようというところまで出てゆくと、途中で日が暮れた。

ひとりの少年が琵琶びわをかかえて来て、楊の車と一緒に載せてくれというので、承知して同乗させると、少年は車中で琵琶數十曲

をひいて聞かせた。楊はいい心持で聴いていると、曲終るや、かの少年は忽ち鬼たちまのような顔色に変じて、眼を瞋いからせ、舌を吐いて、楊をおどして立ち去った。

それから更に二十里（六丁ちよう一里。日本は三十六丁で一里）ほど行くと、今度はひとりの老人があらわれて、楊の車に載せてくれと言った。前に少しく懲こりてはいるが、その老いたるを憫あわれんで、楊は再び載せてやると、老人は王おう戒かいという者であるとみずから名乗った。楊は途中で話した。

「さつき飛んだ目に逢いました」

「どうしました」

「鬼がわたしの車に乗り込んで琵琶を弾きました。鬼の琵琶とい

うものを初めて聴きましたが、ひどく哀かなしいものですよ」

「わたしも琵琶をよく弾きます」

言うかと思うと、かの老人は前の少年とおなじような顔をして見せたので、楊はあつと叫んで気をうしなつた。

兎怪とかい

これも前の琵琶鬼とやや同じような話である。

魏ぎの黄こう初しよ年中に或る人が馬に乗つて頓とん邱きゆうのさかいを通る

と、暗夜の路ばたに一つの怪しい物が転ころがっていた。形は兎うさぎのご

とく、両眼は鏡の如く、馬のゆくさきに跳おどり狂っているので、進

むことが出来ない。その人はおどろき懼れて遂に馬から転げおちると、怪物は跳りかかって彼を掴つかもうとしたので、いよいよ懼れて一旦は氣絶した。

やがて正氣に戻ると、怪物の姿はもう見えないので、まずほつとして再び馬に乗ってゆくと、五、六里の後に一人の男に出逢った。その男も馬に乗っていた。いい道連れが出来たと喜んで話しながら行くうちに、彼は先刻の怪物のことを話した。

「それは怖ろしい事でした」と、男は言った。「実はわたしも独りあるきはなんだか氣味が悪いと思つているところへ、あなたのような道連れが出来たのは仕合わせでした。しかしあなたの馬は疾はやく、わたしの馬は遅い方ですから、あとさきになつて行きまし

よう」

彼の馬をさきに立たせ、男の馬があとに続いて、又しばらく話しながら乗ってゆくと、男は重ねてかの怪物の話をはじめた。

「その怪物というのは、どんな形でした」

「兎のような形で、二つの眼が鏡のようにひか晃っていました」

「では、ちよいと振り返ってごらんなさい」

言われて何心なく振り返ると、かの男はいつの間にか以前の怪物とおなじ形に変じて、前の馬の上へ飛びかかって来たので、彼は馬から転げおちて再び気絶した。

かれの家では、騎手のりてがいつまでも帰らず、馬ばかりが独り戻つて来たのを怪しんで、探しに来てみると右の始末で、彼はようよ

うに息をふき返して、再度の怪におびやかされたことを物語った。

宿命

陳仲挙ちんちゆうきよがまだ立身りつしんしない時に、黄申こうしんという人の家に止し宿しゆくしていた。そのうちに、黄家の妻が出産した。

出産の当時、この家の門を叩たたく者があつたが、家内の者は混雑にまぎれて知らなかつた。暫しばらくして家の奥から答える者があつた。

「客座敷には人がいるから、はいることは出来ないぞ」

門外の者は答えた。

「それでは裏門へまわつて行こう」

それぎりで問答の声はやんだ。それからまた暫くして、内の者も裏門へまわつて歸つて来たらしく、他の一人が訊きいた。

「生まれる子はなんとという名で、幾いくつ歳の寿命をあたえることになつた」

「名は奴どといつて、十五歳までの寿命をあたえることになつた」と、前の者が答えた。

「どんな病気で死ぬのだ」

「兵器で死ぬのだ」

その声が終ると共に、あたりは又ひっそりとなつた。陳はその問答をぬすみ聴いて奇異の感に打たれた。殊にその夜生まれしたのは男の児で、その名を奴と付けられたというのを知るに及んで、

いよいよ不思議に感じた。彼はそれとなく黄家の人びとに注意した。

「わたしは人相にんそうを看みることを学んだが、この子は行くゆく兵器で死ぬ相がある。刀劍もぢろんは勿論、すべての刃物を持たせることを慎まなければなりませんぞ」

黄家の父母もおどろいて、その後は用心に用心を加え、その子にはいつさいの刃物を持たせないことにした。そうして、無事に十五歳まで生長させたが、ある日のこと、棚の上に置いた鑿のみがその子の頭に落ちて来て、脳をつらぬいて死んだ。

陳は後に予章よしやうの太守たいしゆに榮進して、久しぶりで黄家をたずねた時、まずかの子供のことを訊くと、かれは鑿のみに打たれたという

のである。それを聞いて、陳は嘆息した。
「これがまつたく宿命というのであろう」

亀の眼

むかし巢そうの江水がある日にわかみなぎに漲みなぎったが、ただ一日で又もとの通りになった。そのときに、重量一万斤きんともおぼしき大魚が港口に打ち揚げられて、三日の後に死んだので、土地の者は皆それを割いて食った。

そのなかで、唯ひとりの老女はその魚を食わなかった。その老女の家へ見識みしらない老人がたずねて来た。

「あの魚はわたしさかなの子であるが、不幸にしてこんな禍わざわいに逢うことになった。この土地の者は皆それを食つたなかで、お前ひとり
は食わなかつたから、私はおまえに礼をしたい。城の東門前にあ
る石の亀に注意して、もしその眼が赤くなつたときは、この城の
陥かんぼつ没する時だと思いなさい」

老人の姿はどこへか失うせてしまつた。その以来、老女は毎日か
かさずに東門へ行つて、石の亀の眼に異状があるか無いかをあらた検め
ることにしていたので、ある少年が怪しんでその子細を訊くと、
老女は正直にそれを打ち明けた。少年はいたずら者で、そんなら
一番あの婆さんをおどかしてやろうと思つて、そつとかの亀の眼
に朱を塗つて置いた。

老女は亀の眼の赤くなっているのに驚いて、早々にこの城内を逃げ出すと、青衣せいゐの童子が途中に待っていて、われは龍の子であるといつて、老女を山の高い所へ連れて行つた。

それと同時に、城は突然に陥没して一面の湖みづうみとなつた。

もう一つ、それと同じ話がある。秦しんの始皇しこうの時、長ちやうすい水すい県けんに

一種の童謡がはやつた。

「御門ごもんに血を見りやお城が沈む——」

誰たれが謡うたい出したともなしに、この唄うたがそれからそれへと拡がつた。ある老女がそれを気に病んで毎日その城門うかがを窺うかがいに行くので、門を守っている将校が彼女をおどしてやろうと思つて、ひそかに犬の血を城門に塗つて置くと、老女はそれを見て、おどろいて遠

く逃げ去った。

そのあとへ忽ちに大水が溢れ出て、城は水の底に沈んでしまつた。

眉間尺

楚その干将かんしょう莫邪まくやは楚王の命をうけて劍を作つたが、三年かかつて漸ようやく出来たので、王はその遅延を怒つて彼を殺そうとした。

莫邪の作つた劍は雌雄しゆういっつい一対であつた。その出来たときに莫邪の妻は懐妊して臨月に近かつたので、彼は妻に言い聞かせた。

「わたしの劍の出来あがるのが遅かつたので、これを持参すれば

王はきつとわたしを殺すに相違ない。おまえがもし男の子を生んだらば、その成長の後に南の山を見ろといえ。石の上に一本の松が生えていて、その石のうしろにひとつり一口の剣が秘めてある」

かれは雌剣一口だけを持つて、楚王の宮へ出てゆくと、王は果たして怒った。かつ有名の相そうしや者にその剣を見せると、この剣は雌雄一対あるもので、莫邪は雄剣をかくして雌剣だけを献じたこととが判ったので、王はいよいよ怒って直ぐに莫邪を殺した。

莫邪の妻は男の子を生んで、その名を赤せきといったが、その眉間みけんじやくが広いので、俗に眉間尺と呼ばれていた。かれが壮年になった時に、母は父の遺言を話して聞かせたので、眉間尺は家を出て見まわしたが、南の方角に山はなかった。しかし家の前には松の大

樹があつて、その下に大きい石が横たわつていたので、試みに斧をもつてその石の背を打ち割ると、果たして一口の剣を発見した。父がこの剣をわが子に残したのは、これをもつて楚王に復讐せよというのであらうと、眉間尺はその以来、ひそかにその機会を待つていた。

それが楚王にも感じたのか、王はある夜、眉間の一尺ほども広い若者が自分を付け狙ねらつていゝという夢をみたので、千金の賞をかけてその若者を搜索させることになつた。それを聞いて、眉間尺は身をかくしたが、行くさきもない。彼は山中をさまよつて、悲しく歌いながら身の隠れ場所を求めていると、はか図らずも一人のたびびと旅客に出逢つた。

「おまえさんは若いくせに、何を悲しそうに歌っているのだ」と、かの男は訊いた。

眉間尺は正直に自分の身の上を打ち明けると、男は言った。

「王はおまえの首に千金の賞をかけているそうだから、おまえの首とその剣とをわたしに譲れば、きつと仇を報いてあげるが、どうだ」

「よろしい。お頼み申す」

眉間尺はすぐに我が手でわが首をかき落して、両手に首と剣とを捧げて突っ立っていた。

「たしかに受取った」と、男は言った。「わたしは必ず約束を果たしてみせる」

それを聞いて、眉間尺の死骸は初めてたお仆れた。

旅の男はそれから楚王にまみえて、かの首と劍とを獻じると、

王は大いに喜んだ。

「これは勇士の首であるから、この儘ままにして置いては祟たたりをなすかも知れません。湯ゆがまに入れて煮るがよろしゅうござる」と、男は言った。

王はその言うがままに、眉間尺の首を煮ることにしたが、三日を過ぎても少しも爛ただれず、生けるが如くに眼を瞋いからしているので、男はまた言った。

「首はまだ煮え爛たれません。あなたが自身のぞに覗のぞいて卸覧になれば、きつと爛たれましょう」

そこで、王はみずから其の湯を覗きに行くと、男は隙をみてかの剣をぬき放し、まず王の首を熱湯にえゆのなかへ切り落した。つづいて我が首を刎はねて、これも湯のなかへ落した。眉間尺の首と、楚王の首と、かの男の首と、それが一緒に煮え爛れて、どれが誰だか見分けることが出来なくなつたので、三つの首を一つに集めて葬ることにした。

墓は俗に三王の墓と呼ばれて、今も汝南じよなんの北、宜春ぎしゆん県にある。

宋家の母

魏ぎの黄こう初しよ年中のことである。

清せい河かの宋そう士し宗そうという人の母が、夏の日せいかに浴室へはいって、家内の者を遠とほざけたまま久しく出て来ないので、人びとも怪しんでそつと覗のぞいてみると、浴室に母の影は見えないで、水風呂のなかに一頭ひとの大きいすつぽんが浮かんでいるだけであつた。たちまち大騒おほさわぎとなつて、大勢が駈かけ集まると、見おぼえのある母のかんざしがそのすつぽんの頭の上に乗つているのである。

「お母さんがすつぽんに化けた」

みな泣いて騒さわいだが、どうすることも出来ない。ただ、そのまわりを取りまいて泣き叫なんでいると、すつぽんはしきりに外へ出たがるらしい様子である。さりとて滅めつ多たに出してもやられないの

で、代るがわるに警固しているあいだに、あるとき番人の隙をみ
て、すつぽんは表へ這い出した。又もや大騒ぎになって追いか
けたが、すつぽんは非常に足が疾はやいので遂に捉とらえることが出来ず、
近所の川へ逃げ込ませてしまった。

それから幾日の後、かのすつぽんは再び姿をあらわして、宋の
家のまわりを這い歩いていたが、又もや去つて水に隠れた。

近所の人は宋にむかつて母の喪服を着けると勧めたが、たとい
形を変じて母はまだ生きているのであると言つて、彼は喪服を
着けなかつた。

秦しんの時、武都ぶとの故道どとくに怒特やしろの祠やしろというのがあつて、その祠のほとりに大きい梓あざきの樹きが立っていた。

秦しんの文公ぶんこうの、二十七年、人をつかわしてその樹を伐うらせると、たちまちに大風雨が襲おそい來たつて、その切り口を癒ゆ合ごうさせてしまふので、幾日を経ても伐り倒たすことが出来ない。文公は更に人数を増して、四十人の卒そとに斧おのを執とらせたが、なおその目的を達することが出来ないので、卒もみな疲れ果てた。

その一人は足を傷つけて宿舎へも歸られず、かの樹の下に転がったままで一夜を明かすと、夜半に及んで何者か尋ねて來たらしく、樹にむかつて話しかけた。

「戦いはなかなか骨が折れるだろう」

「なに、骨が折れるというほどのことでもない」と、樹のなかで答えた。

一人がまた言った。

「しかし文公がいつまでも強情ごうじょうにやっていたら、仕舞いにはどうする」

「どうするものか。根こんくらべだ」

「そう言っても、もし相手の方で三百人の人間を散らし髪にして、緒あかい着物をきせて、朱あかい糸でこの樹を巻かせて、斧を入れた切り口へ灰をかけさせたら、お前は どうする」

樹の中では黙ってしまった。

樹の下に寝ていた男はその問答を聞きすまして、明くる日それを申し立てたので、文公は試みにその通りにやってみることにした。三百人の士卒が赭い着物をきて、散らし髪になつて、朱い糸を樹の幹にまき付けて、斧を入れるごとに其の切り口に灰をそそぐと、果たして大樹は半分ほども撃ち切られた。そのとき一頭の青い牛が樹の中から走り出て、近所の澧ほうすい水すいという河へ跳り込んだ。

これで目的の通りに、梓の大樹を伐り倒すことが出来たが、青牛はその後澧水から姿をあらわすので、騎士をつかわして撃たせると、牛はなかなか勢たけい猛たけくして勝つことが出来ない。その闘いのあいだに、一人の騎士は馬から落ちて散らし髪になつた。彼

はそのままで再び鞍くらにまたがると、牛はその散らし髪におそれて水中に隠れた。

その以来、秦では旄頭騎ぼうとうきというものを置くことになった。

青い女

呉郡の無錫むしやくという地には大きい湖みずうみがあつて、それをめぐる長い坡どてがある。

坡を監督する役人は丁初ていしよといつて、大雨のあるごとに破損の個所の有無を調べるために、坡のまわりを一巡するのを例としていた。時は春の盛りで、雨のふる夕暮れに、彼はいつものように

坡を見まわっていると、ひとりの女が上下ともに青い物を着けて、青い繖かさをいただいて、あとから追つて来た。

「もし、もし、待つてください」

呼ばれて、丁初はいったん立ちどまったが、また考えると、今頃このさびしい所を女ひとりでうろ付いている筈がない。おそろく妖怪であろうと思つたので、そのまま足早にあるき出すと、女もいよいよ足早に追つて来た。丁はますます気味が悪くなつて、一生懸命に駈け出すと、女もつづいて駈け出したが、丁の逃げ足が早いので、しよせん追い付かないと諦あきらめたらしく、女は俄かに身をひるがえして水のなかへ飛び込んだ。

かれは大きな蒼い河かわ瀬うそで、その着物や繖と見えたのは青い荷はす

の葉であつた。

祭蛇記

東越とうえつの閩みんちゆう中に庸嶺ようれいという山があつて、高さ数十里とい
われている。その西北の峽かいに長さ七、八丈、太さ十圍とかかえもあると
いう大蛇だいじやが棲すんでいて、土地の者を恐れさせていた。

住民ばかりか、役人たちもその蛇の崇たりによつて死ぬ者が多い
ので、牛や羊をそなえて祭ることにしたが、やはりその崇りはや
まない。大蛇は人の夢にあらわれ、または巫女みこなどの口を仮りて、
十二、三歳の少女を生贄いけにえにささげると言つた。これには役人た

ちも困つたが、なにぶんにもその崇りを鎮める法がないので、よんどころなく罪人の娘を養い、あるいは金を賭けて志願者を買ふことにして、毎年八月の朝、ひとりの少女を蛇の穴へ供えると、蛇は生きながらにかれらを呑んでしまった。

こうして、九年のあいだに九人の生贄をささげて来たが、十年目には適當の少女を見つけ出すのに苦しんで、しようらく將樂県の李誕りたんという者の家には男の子が一人もなくて、女の子ばかりが六人ともにつつがなく成長し、末子ぼっしの名を寄きといった。寄は募りに応じて、ことしの生贄に立とうと言ひ出したが、父母は承知しなかつた。

「しかしこの家うちには男の子が一人もありません。厄介者の女ば

かりです」と、寄は言った。「わたし達は親の厄介になっているばかりで何の役にも立ちませんから、いつそ自分のからだを生贄にして、そのお金であなた方を少しでも楽にさせて上げるのが、せめてもの孝行というものです」

それでも親たちはまだ承知しなかったが、しいて止めればひそかにぬけ出して行きそうな気色けしきであるので、親たちも遂に泣く泣くそれを許すことになった。そこで、寄はひとつり一口のよい剣と一匹の蛇喰い犬とを用意して、いよいよ生贄にささげられた。

大蛇の穴の前には古い廟があるので、寄は剣をふところにして廟のなかに坐っていた。蛇を喰う犬はそのそばに控えていた。彼女はあらかじめ数すうこく石の米を炊かしいで、それに蜜をかけて穴の口に

供えて置くと、蛇はその匂いをかぎ付けて大きい頭を出した。その眼は二尺の鏡の如くであつた。蛇はまずその米を喰いはじめたのを見すまして、寄はかの犬を嚇しかけると、犬はまっさきに飛びかかつて蛇を噛んだ。彼女もそのあとから劍をふるつて蛇を斬つた。

さすがの大蛇も犬に噛まれ、劍に傷つけられて、数力所の痛手に堪まり得ず、穴から這い出して蛇打ちまわつて死んだ。穴へはいつてあらためると、奥には九人の少女の髑髏が転がっていた。

「お前さん達は弱いから、おめおめと蛇の生贄になつてしまったのだ。可哀そうに……」と、彼女は言つた。

越の王はそれを聞いて、寄を聘して夫人とした。その父は将樂

県の県令に挙げられ、母や姉たちにも褒美を賜わった。その以来、この地方に妖蛇の患うれいは絶えて、少女が蛇退治の顛てんまつ末を伝えた歌謡だけが今も残っている。

鹿の足

陳郡ちんの謝鯤しゃこんは病いによつて官を罷やめて、予章よしょうに引き籠つていたが、あるとき旅行して空き家に一泊した。この家には妖怪があつて、しばしば人を殺すと伝えられていたが、彼は平気で眠っている、夜の四更しごう（午前一時―三時）とおぼしき頃に、黄衣の人が現われて外から呼んだ。

「幼輿ようよ、戸をあけろ」

幼輿ようよというのは彼の字あざなである。こいつ化け物だと思つたが、彼は恐れずに答えた。

「戸をあけるのは面倒だ。用があるなら窓から手を出せ」

言うかと思つと、外の人は窓から長い腕を突つ込んだので、彼は直ぐにその腕を引つ搦んで、力任せにぐいぐい引き摺り込もうとした。外では引き込まれまいとする。引きつ引かれつするうちに、その腕は脱けて彼の手に残つた。外の人はそのまま立ち去つたらしい。夜が明けてみると、その腕は大きい鹿の前足であつた。窓の外には血が流れている。その血の痕あとをたどつてゆくと、果たして一頭の大きい鹿が傷ついて仆たおれていた。それを殺して以来、

この家にふたたび妖怪の噂を聞かなくなった。

羽衣

予章しんゆ新諭県のある男が田畑へ出ると、田のなかに六、七人の女を見た。どの女もみな鳥のような羽衣はごろもを着ているのである。不思議に思つてそつと這いよると、あたかもその一人が羽衣を解といたので、彼は急にそれを奪い取つた。つづいて他の女どもの衣をも奪い取ろうとすると、かれらはみな鳥に化して飛び去つた。

羽衣を奪われた一人だけは逃げ去ることが出来なかつたので、男は連れ帰つて自分の妻にした。そうして、夫婦のあいだに三人

の娘を儲^もけた。

娘たちがだんだん生長の後、母はかれらにそつと訊いた。

「わたしの羽衣はどこに隠してあるか、おまえ達は知らないかえ」

「知りません」

「それではお父^{とつ}さんに訊^きいておくれよ」

母に頼まれて、娘たちは何げなく父にたずねると、母の入れ知恵とは知らないで、父は正直に打ちあけた。

「実は積み稲の下に隠してある」

それが娘の口から洩^もらされたので、母は羽衣のありかを知った。

彼女はそれを身につけて飛び去ったが、再び娘たちを迎いに来て、三人の娘も共に飛び去ってしまった。

狸老爺たぬきおやじ

晋しんの時、呉興ごこうの農夫が二人の息子を持つていた。その息子兄弟が田たがやを耕かしていると、突然に父があらわれて来て、子細しさいも無しに兄弟を叱しかり散らすばかりか、果ては追い撃とうとするので、兄弟は逃げ帰って母に訴うえると、母は怪訝けげんな顔をした。

「お父とうさんは家うちにいるが……。まあ、ともかくも訊いてみよう」
訊かれて父はおどろいた。自分はさつきから家にいたのであるから、田や畑へ出て行って息子たちを叱しかったり殴うったりする筈はずがない。それは何かの妖怪がおれの姿に化けて行ったに相違ちがないか

ら、今度来たらば斬り殺せと言いつけたので、兄弟もそのつもりで刃物を用意して行つた。

こうして息子らを出してやったものの、父もなんだか不安であるので、やがて後から様子を見とどけに出てゆくと、兄弟はその姿を見て刃物を把り直した。

「化け物め、また来たか」

父は言い訳をする間もなしに斬り殺されてしまった。兄弟はその正体を見極めもせず、そこらの土のなかに埋めて帰ると、家には父がかれらの帰るのを待っていた。

「化け物めを退治して、まずまずめでたい」と、父も息子らもみな喜んだ。化け物が父に変わっていることを兄弟は覺さとらなかつた。

幾年か過ぎた後、ひとりの法師がその家に来て兄弟に注意した。

「おまえ達のお父さんには怖ろしい邪気が見えますぞ」

それを聞いて、父は大いに怒って、そんな奴は早速逐い出してしまうと息子らに言い付けた。それを聞いて、法師も怒った。かれは声を厲しゆうして家内へ跳り込むと、父は忽ち大きい古狸に変じて床下へ逃げ隠れたので、兄弟はおどろきながらも追いつめて、遂に生け捕って撲ち殺した。

不幸な兄弟はこの古狸にたぶらかされて、真の父を殺したのである。一人は憤恨のあまりに自殺した。一人も懊惱のために病いを発して死んだ。

虎の難産

廬陵ろりようの蘇易そえきという婦人は産婦の収生とりあげをもつて世に知られていたが、ある夜外出すると、忽ち虎に啣くわえて行かれた。

彼女はすでに死を覚悟していると、行くこと六、七里にして大きい塚つかあな穴のような所へ行き着いた。虎はここで彼女を下ろしたので、どうするのかわかると思つてよく視ると、そこには一頭の牝めすの虎が難産に苦しんでいるのである。

さてはと覺つて手当てをしようと、虎はつつがなく三頭の子を生み落した。それが済むと、虎は再び彼女を啣くわえて元の所まで送り還した。

その後、幾たびか蘇易の門内へ野獸の肉を送り込む者があつた。

寿光侯

寿光侯じゆこうこうは漢の章帝しょうていの時の人である。彼はあらゆる鬼を祈

り伏せて、よくその正体を見あらわした。その郷里のある女が妖よ魅うみに取りつかれた時に、寿は何かの法をおこなうと、長さ幾丈の大蛇だいじゃが門前に死んで横たわつて、女の病いはすぐに平癒した。

また、大樹があつて、人がその下に止まると忽ちに死ぬ、鳥が飛び過ぎると忽ちに墜おちるといふので、その樹には精せいがあると伝えられていたが、寿がそれにも法を施すと、盛夏まなつにその葉はこと

ごとく枯れ落ちて、やはり幾丈の大蛇が樹のあいだに懸かつて死んでいた。

章帝がそれを聞き伝えて、彼を召し寄せて事実の有無をたずねると、寿はいかにも覚えがあると答えた。

「実は宮中に妖怪があらわれる」と、帝は言った。「五、六人の者が紅い着物をきて、長い髪を振りかぶつて、火を持って徘徊はいかいする。お前はそれを鎮めることが出来るか」

「それは易やすいことでございます」

寿は受けあつた。そこで、帝は侍臣三人に言いつけて、その通りの扮装をさせて、夜ふけに宮殿の下を往来させると、寿は式かたの如くに法をおこなつて、たちまちに三人を地に仆した。かれらは

氣を失ったのである。

「まあ、待ってくれ」と、帝も驚いて言った。「かれらはまことの妖怪ではない。実はおまえを試してみたのだ。殺してくれるな」
 寿が法を解くと、三人は再び正氣に復った。

天使

糜竺びじくは東海くの といふところの人で、先祖以来、貨殖かしょくの道に長たけているので、家には巨万の財をたくわえていた。

あるとき彼が洛陽らくようから帰る途中、わが家に至らざる数十里のところ、ひとりの美しい花嫁ふうの女に出逢った。女はその車

へ一緒に載せてくれと頼むので、彼は承知して載せてゆくと、二十里ばかりの後に女は礼をいって別れた。そのときに彼女は又こんなことをささやいた。

「実はわたしは天の使いで、これから東海の糜竺の家を焼きに行くのです。ここまで載せて来て下さったお礼に、それだけのことを洩らして置きます」

糜はおどろいて、なんとか勘弁してくれるわけには行くまいかとしきりに嘆願すると、女は考えながら言った。

「何分にもわたしの役目ですから、焼かないというわけには行きません。しかし折角のお頼みですから、わたしは徐かしずに行くことにします。あなたは早くお帰りなさい。日中には必ず火が起りま

す

彼はあわてて家へ帰つて、急に家財を運び出させると、果たして日中に大火が起つて、一家たちまち全焼した。

蛇蠱じやくこ

滎陽郡けいようぐんに廖りようという一家があつて、代々一種の蠱術こじゆつをおこなつて財産を作りあげた。ある時その家に嫁を貰つたが、蠱術のこゝとをいえば怖れ嫌うであろうと思つて、その秘密を洩らさなかつた。

そのうちに、家内の者はみな外出して、嫁ひとりが留守番をし

ている日があつた。

家の隅に一つの大きい瓶かめが据えてあるのを、嫁はふと見つけて、
こころみにその蓋ふたをあけて覗くと、内には大蛇がわだかまっていたので、なんにも知らない嫁はおどろいて、あわてて熱湯をそそぎ込んで殺してしまった。家内の者が帰ってから、嫁はそれを報告すると、いずれも顔の色を変えて驚き憂うれいた。

それから暫くのうちに、この一家は疫病にかかつて殆んど死に絶えた。

螻蛄

廬陵ろりようの太守龐企ろうきの家では螻蛄けらを祭ることになっている。

何ゆえにそんな虫を祭るかというに、幾代か前の先祖が何かの連まきぞえ坐で獄屋につながれた。身におぼえの無い罪ではあるが、拷問の責め苦に堪えかねて、遂に服罪することになったのである。彼は無罪の死を嘆いている時、一匹の螻蛄が自分の前を這い歩いているのを見た。彼は憂苦のあまりに、この小さい虫にむかつて愚痴を言った。

「おまえに霊があるならば、なんとかして私を救ってくれないかなあ」

食いかけの飯を投げてやると、螻蛄は残らず食って行つたが、その後ふたたび這い出して来たのを見ると、その形が前よりも余

ほど大きくなつたようである。不思議に思つて、毎日かならず飯を投げてやると、螻蛄も必ず食つて行つた。そうして、数十日を経るあいだに虫はだんだんに生長して犬よりも大きくなつた。

刑の執行がいよいよ明日に迫つた前夜である。

大きい虫は獄屋の壁のすそを掘つて、人間が這い出るほどの穴をこしらえてくれた。彼はそこから抜け出して、一旦の命を生きのびて、しばらく潜伏しているうちに、測らずも大赦たいしやに逢つてせいてんはくじつ青天白日の身となつた。

その以来、その家では代々その虫の祭祀を続けているのである。

父母の霊

劉根りゆうこんは字を君安あぎな くんあんといい、長安ちようあんの人である。漢の成せい帝ていのときに嵩山すうざんに入って異人に仙術を伝えられ、遂にその秘訣を得て、心そのままに鬼を使うことが出来るようになった。

穎川えいせんの太守、史祈しきという人がそれを聞いて、彼は妖法をおこなう者であると認め、役所へよび寄せて成敗しようと思つた。召されて劉が出頭すると、太守はおごそかに言い渡した。

「貴公はよく人に鬼を見せるといふが、今わたしの眼の前へその姿をはつきりと見せてくれ。それが出来なければ刑戮けいりくを加えるから覚悟しなさい」

「それは訳もないことです」

劉は太守の前にある筆や硯すずりを借りて、なにかの御符おふだをかいた。

そうして、机を一つ叩くと、忽ちそこへ五、六人の鬼があらわれた。鬼は二人の囚人を縛つて来たので、太守は眼を据えてよく視ると、その囚人は自分の父と母であつた。父母はまず劉にむかつて謝まつた。

「小悴こせがれめが飛んだ無礼を働きました、なんとも申し訳がございません」

かれらは更に我が子を叱つた。

「貴様はなんとという奴だ。先祖に光栄をあたえる事が出来ないばかりか、かえつて神仙に対して無礼の罪をかさね、生みの親にまでこんな難儀をかけるのか」

太守は実におどろいた。彼は俄かに劉の前に頭をすり付けて、無礼の罪を泣いて詫びると、劉は黙って何処へか立ち去った。

無鬼論

阮瞻は字を千里といい、平素から無鬼論を主張して、鬼などという物があるべき筈がないと言っていたが、誰も正面から議論をこころみて、彼に勝ち得る者はなかった。阮もみずからそれらを誇つて、この理をもつて推すときは、世に幽と明と二つの界があるように伝えるのは誤りであると唱えていた。

ある日、ひとりの見識らぬ客が阮をたずねて来て、式のごとく

時候の挨拶が終つた後に、話は鬼の問題に移ると、その客も大いに才弁のある人物で、この世に鬼ありと言う。阮は例の無鬼論を主張し、たがいに激論を闘わしたが、客の方が遂に言い負かされてしまった。と思うと、彼は怒りの色をあらわした。

「鬼神のことは古今の聖人賢者けんじやもみな言い伝えているのに、貴公ひとりが無いと言い張ることが出来るものか。論より証拠、わたしたしが即ち鬼である」

彼はたちまち異形いぎようの者に変じて消え失せたので、阮はなんとも言うことが出来なくなつた。彼はそれから心持が悪くなつて、一年あまりの後に病死した。

盤瓠

高辛こうしん氏の時代しに、王宮わうきゆうにいる老婦らうふ人が久しく耳みみの疾やまいにかかつて医師いしの治療ちりょうを受けると、医師はその耳みみから大きな繭まゆのごとき虫を取り出した。老婦人が去つた後、瓠ひさごの籬かきでかこつて盤ふたをかぶせて置くと、虫は俄たちかに變じて犬いぬとなつた。犬の毛皮けには五色ごしきの文あやがあるあるので、これを宮中きゆうちゆうに養やしなうこととし、瓠ひさごと盤ふたとにちなんで盤瓠ばんこと名づけていた。

その当時たうじ、戎じゆう呉うごという胡えびすの勢力せいりきが盛さかんで、しばしば国境こくけいを犯せますので、諸將しよしやうをつかわして征討せいたうを試こみても、容易やすに打ち勝つことが出来ない。そこで、天下てんかに触ふれを廻まわして、もし戎呉じゆううごの將軍しやうじゆんの首くび

を取つて来る者があれば、千斤きんの金をあたえ、万戸ばんこの邑むらをあたえ、さらに王の少女を賜わるといふことになつた。

やがて盤瓠は一人の首をくわえて王宮に來た。それはかの戎呉の首であつたので、王はその処分に迷つてゐると、家來たちはみな言つた。

「たとい敵の首を取つて來たにしても、盤瓠は畜類であるから、これに官禄を与えることも出来ず、姫君を賜わること出来ず、どうにも致し方はありますまい」

それを聞いて少女は王に申し上げた。

「戎呉の首を取つた者にはわたくしを与えるといふことをすでに天下に公約されたのです。盤瓠がその首を取つて來て、国のため

に害を除いたのは、天の命ずるところで、犬の知恵ばかりではありません。王者は言を重んじ、伯者は信を重んずと申します。女ひとりの身を惜しんで、天下に対する公約を破るのは、国家の禍いでありますよう」

王も懼れて、その言葉に従うことになった。約束の通りに少女をあたえると、犬は彼女を伴って南山にのぼった。山は草木をい茂つて、人の行くべき所ではなかった。少女は今までの衣裳を解き捨てて、賤しい奴僕の服を着け、犬の導くままに山を登り、谷に下つて石室のなかにとどまった。王は悲しんで、ときどきその様子を見せにやると、いつでも俄かに雨風が起つて、山は震い、雲は晦く、無事にその石室まで行き着くものはなかった。

それから三年ほどのあいだに、少女は六人の男と六人の女を生んだ。かれらは木の皮をもつて衣服を織り、草の実をもつて五色に染めたが、その衣服の裁ち方には尾の形が残っていた。盤瓠が死んだ後、少女は王城へ帰つてそれを語つたので、王は使いをやつてその子ども達を迎い取らせたが、その時には雨風の祟りもなかつた。

しかし子供たちの服装は異様であり、言葉は通ぜず、行儀は悪く、山に棲むことを好んで都を嫌うので、王はその意にまかせて、かれらに好い山よや広い沢地をあたえて自由に棲ませた。かれらを呼んで蛮夷といった。

金龍池

晋しんの懷かいてい帝ていの永嘉えいか年中に、韓かん媪おんという老女が野なかで巨おおきい卵をみつけた。拾つて歸つて育てると、やがて男の児が生まれて、その字あざなを※児けつじといつた。

※児が四歳のとき、劉りゅう淵えんが平陽へいようの城を築いたが、どうしても出来ない。そこで、賞をかけて築城術の達者を募ると、※児はその募集に応じた。彼は変じて蛇となつて、韓媪に灰を用意しろと教えた。

「わたしの這つて行くあとに灰をまいて来れば、自然に城の繩張りが出る」

韓媼はそのいう通りにした。劉淵は怪しんで※児を捉えようとすると、蛇は山の穴に隠れた。しかもその尾の端が五、六寸ばかりあらわれていたので、追っ手は剣をぬいて尾を斬ると、そこから忽ちに泉が湧き出して池となつた。金龍池の名はこれから起つたのである。

発塚異事

三さん国こくの呉ごの孫そん休きゆうのときときに、一人ひとりの成じゆう将しようが広こう陵りゆうを守つていたが、城の修繕をするために付近の古い塚を掘りかえして石の板をあつめた。見あたり次第にたくさんの塚をぶち壊こわして

いるうちに、一つの大きい塚をあば発掘することになった。

塚のうちには幾重いくちようの閣かくがあつて、その扉とびらはみな回転して開閉自在に作られていた。四方には車道が通じていて、その高さは騎馬の人も往来が出来るほどである。ほかに高さ五尺しやくほどの銅人どうじんが数十も立っていて、いずれも朱衣、大冠、劍を執つて整列し、そのうちの石壁には殿中將軍とか、侍郎常侍とか彫刻してある。それらの護衛から想像すると、定めて由緒ある公侯の塚であるらしく思われた。

さらに正面の棺を破つてみると、棺中の人は髪がすでに斑白はんぱくで、衣冠鮮明、その相貌は生けるが如くである。棺のうちには厚さ一尺ほどに雲母きんらを敷き、白い玉三十個を死骸の下に置き列ならべて

あつた。兵卒らがその死人をか昇き出して、うしろの壁にもた倚せかけると、冬瓜とうがのような大きい玉がその懐中から転げ出したので、驚いて更に検査すると、死人の耳にも鼻にもなつめ棗の実ほどの黄金が詰め込んであつた。

次も墓あらしの話。

漢のこうせんおう広川王も墓あらしを好んだ。あるときらんしよ欒書の塚をあばくと、棺も祭具もみな朽ち破れて、何物も余されていなかつたが、ただ一匹の白い狐が棲んでいて、人を見ておどろき走つたので、王の左右にある者が追いかけたが、わずかにほこ戟をもつてその左足を傷つただけで、遂にその姿を見失つた。

その夜、王の枕もとに、ひげ鬚も眉もことごとく白い一個のじょうふ丈夫

があらわれて、お前はなぜおれの左の足を傷つけたかと責めた上に、持った杖をあげて王の左足を撃つたかと思うと、夢は醒めた。

王は撃たれた足に痛みをおぼえて一種の悪瘡あくそうを生じ、いかに治療しても一生を終るまで平癒しなかった。

徐光の瓜

三国の呉ごのとき、徐光じょこうという者があつて、市中へ出て種々の術をおこなっていた。

ある日、ある家へ行つて瓜うりをくれというと、その主人が与えな

かった。それでは瓜の花を貰いたいと言って、地面に杖を立てて花を植えると、忽ちに蔓つるが伸び、花が開いて実を結んだので、徐は自分も取って食い、見物人にも分けてやった。瓜あきんどがそのあとに残った瓜を取って売りに出ると、中身はみな空からになつていた。

徐は天候をうらない、出水ひでりや旱の事を予言すると、みな適中した。かつて大將軍そんりん孫の門前を通ると、彼は着物の裾すそをかかげて、左右に唾つばしながら走りぬけた。ある人がその子細をたずねると、彼は答えた。

「一面に血が流れていて、その臭においがたまらない」

將軍はそれを聞いて大いに憎んで、遂に彼を殺すことになつた。

徐は首を斬られても、血が出なかった。

將軍は後に幼帝を廢して、さらに景帝けいていを擁立し、それを先帝みささぎの陵に奉告しようとして、門を出て車に乗ると、俄かに大風が吹いて来て、その車をゆり動かしたので、車はあやうく傾きかかった。

この時、かの徐光が松の樹の上に立って、笑いながら指図しているのを見たが、それは將軍の眼に映っただけで、そばにいる者にはなんにも見えなかった。

將軍は景帝を立てたのであるが、その景帝のためにたちまちちゆう誅せられた。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

入力…tatsuki

校正…もりみつじゅんじ

2003年7月31日作成

2007年7月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 ([http://www](http://www.aozora.gr.jp/)

www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

中国怪奇小説集

搜神記（六朝）

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 岡本綺堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>